研究ノート

明治三十八―三十九年東北大飢饉と仏教

――『中外日報』をめぐって――

小川原正道

一、はしがき
二、『中外日報』紙上の東北大飢饉と仏教――明治三十八年二月まで
三、『中外日報』紙上の東北大飢饉と仏教――明治三十九年五月まで
四、むすび

一、はしがき

明治三十八（一九〇五）年、岩手、宮城、福島の三県を低温多湿、低日照の気候が襲い、平年の一割から三割程度しか収穫できないという大凶作となり、翌年にかけて深刻な大飢饉が発生した。これは、衆議院が「宮城、福島、岩手三県ニ於ケル凶作ノ程度ハ之ヲ飢饉ノ歴史ニ徴スルモ遠ク天明、天保度大飢饉時代ノ凶作ニ勝ルノ惨状ヲ呈セリ……自治機関ハ停止シ一家衣食ニ窮シテ児童学ヲ廃シ小学校ハ為ニ閉鎖ノ已ムヲ得サルニ至ラムトス加フルニ時厳寒ニ際シ飢寒交々至リ数十万ノ窮民座シテ死ヲ待ツノ悲境ニ瀕セリ」として、政府に「適当ノ救恤方法」を設けて予算を提出し、窮民救済にあたるよう建議するほど深刻なもの

であった。[1]

この大飢饉に際し、ドイツ改革派教会の宣教師、ウィリアム・ランプ（William Lampe）を中心に海外支援委員会が組織され、飢餓に苦しむ人々の救済にあたり、世界中のメディアや外国政府が救済に取り組んだ過程をM・ウィリアム・スティール（M. William Steele）は、詳細にあきらかにしている。外国人だけでなく、日本のメディアやクリスチャンなども積極的に活動に加わった。[2]

外国人宣教師の救済運動については、宮城縣編『明治三十八年宮城縣凶荒誌』（宮城縣、大正五〈一九一六〉年）の第六編・第八章「宗教家の救済運動」でも、すでにその概要が言及されている。ここでは、仙台市の仏教各宗が輪王寺に救済運動の本部を置いて浄財の喜捨を募ろうとした活動についても言及があるが、詳細についてはなおあきらかにされていない。日本の仏教界の対応についてのまとまった成果としては、吉田久一氏の『吉田久一著作集6　改訂増補版　日本近代仏教社会史研究・下』（川島書店、平成三〈一九九一〉年）第三部・後編・二章「一　東北大凶作の救済活動」がある程度である。ランプは、日本仏教は資金を集めようと努力したものの、日本の人々は彼等にほとんど貢献していないと嘆いているが、[3]吉田氏の研究では、かなり活発な活動をみてとることができる。本当に日本の仏教側の活動はうまくいかなかったのであろうか。

そこで本稿では、当時発行されていた超宗派の宗教新聞『中外日報』の記事を追いながら、補足的に『東京朝日新聞』と『読売新聞』の報道も用い、日本の仏教界が大飢饉に対してどのように対応していったのかについてあきらかにしたい。「国内的・国際的に連携して危機救済にあたった最初の大きな事例」だったこの飢饉[4]において、本稿は、日本の仏教界がどのように救済にあたったかを検証する試みである。

二、『中外日報』紙上の東北大飢饉と仏教——明治三十八年二月まで

『中外日報』は、明治三十年に、浄土真宗本願寺派寺院に生まれた真渓涙骨によって超宗派の宗教新聞として創刊された。[5]以下、同紙の飢饉関連記事を追っていこう。

『中外日報』の紙面を調査したところ、明治三十八年十二月十日付同紙に「各宗救済会の飢饉救済」と題する記事が見いだされた。「東奥三県凶作地中宮城県は其中心にして悲惨も甚だしとて同県の天台、真言、浄土、臨済、曹洞、真宗、日蓮、黄檗、時宗の各宗共同して仙台仏教各宗救済

会を組織し広く仁人義士に訴へて義援金を募集し同県の窮民を恤む由」と伝え、仙台仏教各宗救済会なるものが組織されて義捐金募集をはじめたことがわかる。[6] 次いで同月十八日付の同紙には「仏教徒の飢饉救済」という記事が掲載され、「宮城県下に於ける本年の飢饉は実に名状すべからざる悲惨を極めつゝあるか、同県下各宗寺院は之を見るに忍びずとして今回仙台市北山町輪王寺内に各宗救済会なるものを設け屡々有志の義捐を募りて窮民の救助に努めつゝある由、たとひ山川を隔つる遠国と云へとも僧侶と信徒たるを問はず奮つて此美挙に応せられたきものなり」と、仙台の輪王寺に設けられた各宗救済会への義捐金募集を呼びかけている。[7]

救済会の規程は、以下の通りであった。

一　本部を仙台市北山町輪王寺に置く
一　義捐金は多少に拘わらざること
一　義捐金は救済会本部又は宮城県庁へ御送致を乞ふこと
一　義捐金は受領の上宮城県庁へ預け窮民へ配布を委託すること
一　義捐金の受領後は県庁の交付を受けたる上之を本会より義捐諸君に配付す[8]

また、仙台市の天台宗、真言宗、浄土宗、臨済宗、曹洞宗、真宗（本派、大谷派）、日蓮宗、黄檗宗、時宗の「各宗協同救済会」名で発せられた檄文は、「宮城県仙台市仏教各宗寺院等哀泣して天下慈仁の諸士に訴ふ」として、天候不順による凶作の実態を切々と訴え、「平年収穫し来れる百三十万石は一粒米だも得て望むべからず」とし、「糧食なく空しく手を拱せんか飢餓を如何せん或は老幼婦女争ふて山野に草根木実を採掘し壮齢の男子は救済工事に多少の日雇賃を得るに勤めて日夜汲々たる」現状を吐露し、「各宗共同一致し以て此救済團を組織し天下仁人諸士が相憐み相救はんとする悲涙の血滴々なる義捐金を仰ぎ依て此窮民を救恤せんと欲す」と訴えた。[9]

各宗協同救済会の義捐金募集活動はその後活性化し、同会の委員氏家浄限と平井学俊の二名が上京し、各宗管長の同意を求め、「義援金募集奔走中なり」と『中外日報』明治三十九年一月十四日付は伝えている。同記事によれば、この活動はもっぱら窮民に医療と糧食を提供するためのものであり、「同情の人々に多寡に拘らず同会本部なる仙台市北山町輪王寺内若くは宮城県庁内仏教救済会へ送金あり

たし」と呼びかけている。[10]

『中外日報』明治三十九年一月二十四日付と『東京朝日新聞』同年一月二十四日付朝刊によると、福島県では、新学期から小学校がはじまるにあたり、飢饉のため教科書を購入できず同県の小学校が閉鎖されることとなったため、福島県仏教救済会が設立され、運動委員が上京して教科書や資金の募集を勧誘中であると伝えている。[11]『読売新聞』明治三十九年一月二日付朝刊では、日蓮宗青年会が「救済袋」五千袋を印刷して各方面に配布し、金米の募集に従事し、幻灯、道路布教などに熱心に取り組んでいると報じられている。[12] この間、一月十五日には真言宗連合各派管長は派内寺院に仙台に設置された各宗救済会に浄財を投ずべきことをすすめている。[13]

『中外日報』明治三十九年一月二十九日付によると、東京では「仏教主義の新聞雑誌記者」が浅草伝法院において相談会を開き、各種の決議をなして連合事務所を浅草山の第十九風光社内に設けた。参加したのは、『仏教新聞』（松浦育英）、『無尽灯』（宮谷法含）、『東光』（梶寶順）、『三寶叢誌』（拓殖信秀）、『教界時事』（妻木直良）、『浄土新報』（三星輿市）、『新仏教』（高島圓）、『東亜の光』（田中弘之）、等であった。一月二十八日、三十日、二月四日と「救済演説会」が、それぞれ浅草伝法院、芝増上寺、九段坂仏教倶楽部で開催され、村上専精、田中弘之、南条文雄、大内青巒などが演台に立った。[14] また、『中外日報』一月三十日付は、天台宗の青年たちが発起した慈善音楽会の寄付金五百八十余円が凶作地に寄附されることとなったと伝えている。[15] このほか、東京府芝区栄立院の住職荒川弁達は東北救済の挙を思い立ち、浄土宗有志の名義で本山の許可を得て托鉢し、その浄財を東北三県に送ろうとしているという。[16] 長野県の善光寺は同情袋を作り、白米を集めて東北三県へ送る計画を示した。[17]

『中外日報』明治三十九年二月八日付によると、先述の新聞雑誌記者連合会は、二十一カ所に義捐金受付所を設け、演説会も予定通り開会し、十五円の義捐金を得て、芝増上寺での演説会でも三十円を集めたが、まだ十分ではないとして、本郷、芝、四谷、赤坂、深川など九カ所に会場を設けて運動を展開するとしている。[18] 東京府芝区の浄土宗有志救済会は救済のため府内を托鉢して廻っているという。[19] 義捐金募集のため上京中だった氏家浄限などは「仏教徒の同情」を獲得すべく、東京市内各所で演説会を催すこととなり、二月九日（品川）、二月十日（本所、小石川）、二月十一日（深川）、二月十七日（日本橋、四谷）、二月十八日

（下谷）、で演説会が開かれることとなった。[20] 主催団体は「仏教各宗連合救済会」で、「世上の仁人に向つて義捐金（一口金五銭以上、三月三十一日限）」を募集した。[21] また、仏教主義新聞雑誌社連合会は大日本仏教青年会と合同で慈善音楽会を開催することとなった。[22]『中外日報』二月十四日付は「凶作地の雪の夜」と題して、極寒下の凶作地の悲惨な状況を活写し、「寒風吹き入れとも防がんに由なく夜暗けれとも油なけれは火を点ずるを得ず、あはれや」などと伝えている。[23] 二月十一日には本郷湯島の寺院で救済演説会が催され、聴衆の一人が自身の羽織を脱いで救済費に加えて欲しいと申し出る一幕もあった。[24] 京都・妙心寺の花園学林学徒が二月十五日から托鉢をはじめ、東京朝日新聞京都支局前で読経して東北飢饉救済義捐金募集への協力を求め、市民から義捐金や米などを集めたという。[25] 福岡県の少林寺では、東北地方凶作救済のための演説会が二度開催され、僧侶の天本梅可などが演台に立った。[26]「仏教主義新聞雑誌社連合会」は東京市内で仏教各宗派団体連合会と共同し、米一升を入れる麻袋十万個を作って「慈善袋」と名付け、信徒たちへ配付し、一袋が一人に渡るよう措置している。[27] 東北三県救恤会なる団体が二月二十二日に第五回目の寄附として一万一千七百五十八円を凶作地に寄附し、五回で計十万七千六百六円に達したという。[28] 内務省の調査によると、宮城県の窮民は八千戸、四万二千人、福島県は一万四百戸、七万三千人、岩手県が一万七百九十一戸、五万七千九百三十八人であった。[29]『中外日報』によると、福岡市の仏教団体精養会と求道会の主唱で東北凶作救済のための仏教演説会が二月十六日から三日間、少林寺において開催され、毎回四百名余りが来場し、「四恩の説」「郵便据置貯金」などの演題で演説があり、会費などを東北飢饉地に寄贈したという。[30]

もっとも、浄土真宗の本山レベルの対応は鈍かったようである。『中外日報』明治三十九年二月二十八日付は、「冷淡なる築地本願寺」と題する記事を掲載し、「本派本願寺関東第一の出店たる築地別院は其外観は確に立派なり、然れども此別院内に温き感触のなきは恰も氷を用て造れる宮殿の其れの如し」と批判して、今回の大飢饉に際しては米国の大統領がキリスト教の博愛の精神から救済に努力しつつあるのに対し、「然るに築地本願寺は之を見て自から教家応分の仁慈を挙げざるのみならず、仏教主義の新聞雑誌社が連合運励して義金募集を試みし節、彼等は築地本願寺を有力なる応援者と見込んで依頼する所ありしも、元来氷御殿の中に起臥して、脳に同情の温なき彼等は何んの耻し

味もなく此か応援を峻拒したりし」（傍点原文）と、仏教主義新聞雑誌社連合会の協力要請を拒否したと批判している。[31]

三、『中外日報』紙上の東北大飢饉と仏教――明治三十九年五月まで

『東京朝日新聞』明治三十九年三月一日付朝刊によると、仏教青年伝道会会員が日夜路傍に立って飢饉地へ送る慈善袋を勧誘していたが、同会会員の福田会育児院幹事岩崎信雄が飢饉地の窮状を説いたところ、飢饉地から上京したばかりの「田舎風の男が突然同氏に抱き付き頭を下げ声を出さん許りに泣き出せり」といい、「何卒郷人の為めに頼みます頼みますと伏し拝まれ同氏始め聴衆も思はず同情の涙」に袖を潤したという。[32] 鎌倉円覚寺内仏教伝道会は第一回として二十八円五十六銭、第二回として二十六円七十四銭を集めて寄附した。[33]

三月九日、「仏教主義各雑誌新聞記者の発起になる東北凶作地救済会」が義捐金千円を送付した。[34] 大磯の真言宗寺院地福寺住職福井雄正等の発起により、周辺の百余寺と連携して義捐金の募集に奔走しているという。[35] 本願寺本山レベルの動きは相変わらず鈍く、『中外日報』三月十四日付は、「ワケの解らぬ慈善財団」と題して、東北飢饉救済は慈善財団から相当の義捐金を出し、門末に向かってこれを奨励しなければならないにもかかわらず、「少しも此の挙を為さぬのはワケが解らぬ、強欲なる本願寺、無情なる本山、其冷酷残忍厚顔なる誠にお話にならぬ次第だ」と厳しく批判している。[36]

福島県の中村豪詮、中村義監が渋沢栄一の後援を得て飢饉の救済に奔走していたが、彼等は先ず自己資産の大半を救済に費やした上で「公衆の同情を求むる殊に従事したる由」であり、窮民が口にしている葉や草根、豆粕などを見せて廻ったため、これを見た人は同情の感に打たれて救済に応じているという。この二人には佐々木教純という福島県双葉郡大聖寺の住職が同行しており、佐々木は凶作地の児童の「廃学」を救助するため尽力した。[37] 海外の仏教徒からの義捐金も寄せられており、『中外日報』明治三十九年三月十七日付によれば、北米在住の仏教徒は故国の同胞を哀れみ、本願寺開教師朝枝不朽を通じて「北米フレスノー市」の青年会有志から第一回の義捐金百六十二円三十銭が送付され、ホノルル府真宗婦人会からも今村布教監督を経て二十二円が寄贈された。[38]

肥前長崎真宗青年崇徳会は東北三県凶作地救済のため金

品収集に奔走し、宮城県へ二百五十円、岩手県へ百六十円余り、福島県へ百六十円余り、白米や衣類なども送付したという。[39]「仏教各宗派団体連合会」が一升入りの布製米袋を造り、慈善袋の名の下に世の慈善家に配布し、さらに「野天伝道」を盛行して同情心を喚起した功績が大きく、『中外日報』明治三十九年三月二十三日付によれば、袋の制作高一万三千個、印刷物（寄附米依頼状）三万五千枚、慰問状二万四千枚に及んだ。[40]東京における大谷派末寺の団体が、東北凶作窮民救済のために運動し、白米五千袋、米代五百余円を発送したという。[41]芝増上寺では、三月一日から七日までの一週間、五重伝法会を執行し、東北凶作地窮民救助のため参拝者に同情米喜捨を呼びかけたところ、米一升袋九百二十九個を得たため、これを凶作地に発送した。[42]『読売新聞』三月十九日付朝刊によれば、小石川区音羽の護国寺にある豊山中学校では、東北三県から出京している学生に限って編入を許し、本年中の月謝を免除することとしたという。[43]真言宗では各派有志が救済檄文を発し、巡回布教使に東北救恤の勧諭をさせている。[44]下谷練塀町の真宗高田派専修寺出張所婦人会は本郷座で慈善演劇を開き、三百六十円を東北三県凶作地に寄附した。[45]福島・宮城・岩手三県の日蓮宗有志も三月十五日に宗務当局に対して請願書を提出し、報国義会の開設と義捐金醵出などを求めている。[46]

窮民救済に対しては批判的な声もあがっていた。『中外日報』明治三十九年四月十日付の「新仏教徒の声」と題する記事では、「矢タラ救助を与へる時は、其結果は漸々彼等の独立心を奪ふて何にかと云へば世の慈善家を依頼する様にせぬとも限らぬ」と救助に頼ることは独立心をそぐことになると危惧していた。[47]『中外日報』四月十七日付は社説に「慈善の真意義」と題する記事を掲げ、東北三県の凶作救済に対して世の慈善家が寄せた救恤金は五十万円以上に及んでいるが、「世の慈善家並に経世家が今少しく慈善を行ふに細心の注意を払て、十万二十万といふ多くの金額をば、直に彼等窮民の一個〳〵に恵まずして、更に之を元（ママ）資として彼等の幾分だにも産に就き業に就くの方法を講ぜざれなば、慈善の精神、慈善の意義は、かくして始て光輝あり、発展あり、而て能所の意思、茲に貫通し、双方の情意、茲に満足せられなん」（傍点原文）として、義捐金が窮民の就職につながってこそ意義があると力説している。[48]

東京の寺院が「公共的事業」にその本堂を使用しようとする傾向もみられはじめ、浅草萬隆寺は凶作地孤児百三十名を収容して本堂に宿泊させ、浅草九品寺も窮民百七名の宿舎を提供したという。[49]広島の徳氷寺住職が東北飢饉救済

の目的で同市内の誓願寺で「実況幻灯演説会」を開いた。[50] 本願寺もようやく本腰を上げたらしく、『中外日報』明治三十九年五月十日付によれば、東北三県の孤児を「慈善財団」に収容し、「本願寺看護婦養成所仏教婦人会は総出にて寝食に斡旋し全会財団よりは年々金五百円を寄贈すること、なり、翌一日出発して大阪を通過せる時には本願寺別院慈善團より金品を寄贈」した。[51] 慈善財団の保護下にある岡山の「仏教甘露孤児院」の「津田明導」と京都の「軍人遺孤養育院」の「河村雄山」が凶作地の児童百名を現地から連れて帰り、築地本願寺は新調の衣服を贈与する予定だという。[52] 下谷入谷町長松寺の住職が凶作地を巡察し、岩手県の孤児三十二名を連れ帰って同寺に収容し、同善小学校に無償で入学させた。[53] 成田学園の主任大友秀松は、東北地方凶作の救済の一助として、現地の「不良児童」を収容し、講演会や演芸会を開いて寄付金を募っている。[54] 大阪の浄明寺内に設置された青年団体御法会では、東北三県飢饉救恤のため「同情袋」を調達して義捐米を募集し、六千六百個を集めて凶作地に送った。[55]

『中外日報』の東北凶作地救済に関する報道は、明治三十九年五月をもって終わっている。

四、むすび

明治三十八年から翌年にかけての東北大飢饉に際し、日本の仏教団体や仏教徒は決して座して動かなかったわけではない。仏教各宗協同救済会や新聞雑誌記者連合会を中心として、托鉢に廻り、演説会を催し、音楽会を開き、新聞社に訴え、米袋を作るなどして、義捐金や米の収集に努め、これを現地に送った。正確な義捐金の募集額が判明しないため、その規模を測定することは難しいが、当初は消極的だった本願寺も支援に乗り出し、芝増上寺も米袋収集に取り組むなど、本山レベルでの支援活動もみられた。救済の是非をめぐっては議論があったが、日本の仏教界全体としては窮民保護、孤児救済に積極的であったといえよう。

もっとも、真言宗の専門誌『六大新報』百三十六号（明治三十九年三月十一日）に掲載された社説「再び東北三縣の救濟に就て」は、「基督教徒の如きは説令ひ同教が歴史的因縁の浅からざる仙台地方の為とは云へ、渠等少数の教徒にして已に莫大の義捐を醵集送附せし」という実態に対し、「仏教徒中にも率先して、現世的救済の大本領を発揮し、先づ自ら衣鉢の料を割きて他に其模範を示すのみなら

ず、大に他を誘導して善事を奨励し以て、脚下の饑寒瀕死の衆生を助けざる可らざるなり」（傍点原文）と述べ、仏教徒も率先して救済にあたるべきだと訴えており、そこには、キリスト教徒に先を越されているという焦りがあった。[56] その状況――仏教がキリスト教に後れを取っている実態――が、冒頭で触れたランプの印象につながったのであろう。

（1）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A14080134000、議院回付建議書類原議（二）（国立公文書館）。
（2）M. William Steele, The Great Northern Famine of 1905–1906: Two Sides of International Aid『アジア文化研究』三十九（平成二十五〈二〇一三〉年三月）, pp.1–15.
（3）Ibid., p.8.
（4）Ibid., p.4.
（5）拙稿「近代における出版・メディアと宗教」（島薗進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教 近世から近代へ 第五巻 書物・メディアと社会』春秋社、平成二十七年）、二一三頁。発刊当初は『教学報知』、明治三十五年に『中外日報』と改題。
（6）『中外日報』明治三十八年十二月十日付。
（7）『中外日報』明治三十八年十二月十八日付。
（8）『東京朝日新聞』明治三十八年十二月七日付朝刊。
（9）宮城縣編『明治三十八年宮城県凶荒誌』（宮城縣、大正五年）、七一二―七一三頁。仙台市長早川智寛も各宗管長に、各宗救済会の趣旨を訴えている（吉田久一『吉田久一著作集6 改訂増補版 日本近代仏教社会史研究・下』川島書店、平成三年、一〇八―一〇九頁）。福島、岩手、宮城の仏教団体が連合して「東北三県各宗連合救済会」も組織されている（前掲『明治三十八年宮城縣凶荒誌』、七一三頁）。
（10）『中外日報』明治三十九年一月十四日付。
（11）『中外日報』明治三十九年一月二十四日付、『東京朝日新聞』同年一月二十四日付朝刊。育児救済事業については、前掲『吉田久一著作集6 改訂増補版 日本近代仏教社会史研究・下』、一四九―一六五頁、参照。
（12）『読売新聞』明治三十九年一月二日付朝刊。
（13）前掲『吉田久一著作集6 改訂増補版 日本近代仏教社会史研究・下』、一〇七頁。
（14）『中外日報』明治三十九年一月二十九日付。
（15）『中外日報』明治三十九年一月三十日付。
（16）『中外日報』明治三十九年二月七日付。
（17）『東京朝日新聞』明治三十九年二月四日付朝刊。『東京朝日新聞』明治三十九年三月十日付朝刊によると、一升入りの同情袋八百九十個金百四十余円が集まったという。

(18) 『中外日報』明治三十九年二月八日付。
(19) 『中外日報』明治三十九年二月九日付。
(20) 『中外日報』明治三十九年二月九日付。
(21) 『東京朝日新聞』明治三十九年二月十日付朝刊。
(22) 『中外日報』明治三十九年二月十三日付。
(23) 『中外日報』明治三十九年二月十四日付。
(24) 『中外日報』明治三十九年二月十四日付。
(25) 『中外日報』明治三十九年二月十七日付。
(26) 『中外日報』明治三十九年二月十九日付。
(27) 『東京朝日新聞』明治三十九年二月二十日付朝刊。
(28) 『中外日報』明治三十九年二月二十五日付。
(29) 『中外日報』明治三十九年二月二十八日付。
(30) 『中外日報』明治三十九年二月二十八日付。
(31) 『中外日報』明治三十九年二月二十八日付。
(32) 『東京朝日新聞』明治三十九年三月一日付朝刊。
(33) 『東京朝日新聞』明治三十九年三月四日付朝刊。
(34) 『中外日報』明治三十九年三月十三日付。
(35) 『東京朝日新聞』明治三十九年三月十一日付朝刊。
(36) 『中外日報』明治三十九年三月十四日付。ここでいう慈善財団とは、明治三十四年に本願寺派が設立した大日本仏教慈善会財団のことである（名和月之介「明治中期における仏教慈善事業の形成について」『四天王寺国際仏教大学紀要』人文社会学部第三十九号、平成十七年三月、二九—四四頁）。
(37) 『中外日報』明治三十九年三月十五日付。
(38) 『中外日報』明治三十九年三月十七日付。
(39) 『中外日報』明治三十九年三月十九日付。
(40) 『中外日報』明治三十九年三月二十三日付。
(41) 『中外日報』明治三十九年三月三十日付。
(42) 『中外日報』明治三十九年四月二日付。
(43) 『読売新聞』明治三十九年三月十九日付朝刊。
(44) 前掲『吉田久一著作集6　改訂増補版　日本近代仏教社会史研究・下』、一〇七頁。
(45) 『東京朝日新聞』明治三十九年四月十二日付朝刊。
(46) 前掲『吉田久一著作集6　改訂増補版　日本近代仏教社会史研究・下』、一〇九頁。
(47) 『中外日報』明治三十九年四月十日付。
(48) 『中外日報』明治三十九年四月十七日付。
(49) 『中外日報』明治三十九年四月二十三日付。
(50) 『中外日報』明治三十九年五月九日付。
(51) 『中外日報』明治三十九年五月十日付。
(52) 『東京朝日新聞』明治三十九年四月二十五日付朝刊。「甘露孤児院」とは、「甘露育児院」のことだと思われる。甘露育児院の東北飢饉孤児救済事業については、坂本忠次編著『津田白印と孤児救済事業』（吉備人出版、平成二十二年）、一八—二四頁、参照。同院は飢饉地帯の寺院や檀

徒の孤児を率先して受け入れており、例えば、福島県の正覚寺の孤児六名と大聖寺の檀徒の孤児四名、実蔵寺の檀徒の孤児一名、観音寺の檀家の孤児一名が収容されている（小林雨峰「東北凶作地を見舞ふの記」『加持世界』第六巻七号、明治三十九年七月、五四頁）。

(53) 『東京朝日新聞』明治三十九年五月二十八日付朝刊。この点については、前掲『吉田久一著作集6　改訂増補版　日本近代仏教社会史研究・下』、一五一―一五二頁も参照。

(54) 成田学園編『成田学園五十年史』（成田学園、昭和十一〈一九三六〉年）、一七六―一七九頁。

(55) 『中外日報』明治三十九年五月十七日付。

(56) 「再び東北三縣の救濟に就て」（『六大新報』一三六号、明治三十九年三月十一日）、一―二頁。この点については、前掲『吉田久一著作集6　改訂増補版　日本近代仏教社会史研究・下』、一〇七頁、参照。前掲『六大新報』一三六号の雑報欄「東北饑饉救済に就て」でも、「基督教徒の如きは気脈を通じ同一歩調を以て救済の事に従ひ居るを以て、義捐金及救済事業等大に人目を引くものあるも仏教徒は各自思ひ〳〵に救済に従ひ居るを以て（事実は基督教已上の働きを為しつゝあるも）自然基督教徒に後るゝの観なき能はず」と、キリスト教に後れをとっていることへの危機感が表明されている（一四頁）。

追記　本研究はJSPS科研費25370790の助成を受けたものである。